「希望」

鶴居村教育委員会教育長　村上明寛

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんは、「希望」をもって中学校に入学したのもつかの間、コロナ禍で一か月を超える休校。その後も、様々な学校行事や部活動などで影響を受け、辛い思いもされたことと思います。そうしたことを乗り越え、「希望」を胸に中学の学び舎を飛び立つ皆さんに心からエールを送ります。

さて、ちょっと小難しいことを書きます。

鶴居村図書館では、毎年「古本市」を開催し、廃棄予定の本や雑誌を希望する方にお譲りしています。昨年秋の「古本市」で私は、ある本を見つけました。三木清著「人生論ノート」。高校生のときに当時の現代国語の教師が強く推薦していたので、読んだ本です。哲学の入門書のようなもので、当然、高校生の私には難解で、読み切ったかどうかもよく覚えていません。勤めてからも、時折、思い出したように読み返し、「わかったような気がする」部分が増えてきたような気もしますが、未だに意味不明なところが多々あります。

この「人生論ノート」は、１９４１年に出版されて以来、絶版されることもなく読み継がれている名著で、平成の終わりころには再ブームもありました。内容は、「死」「幸福」「孤独」「嫉妬」など、人が生きるうえで直面するであろう問題について書かれていますが、その中に「希望について」というテーゼがあります。

ここで三木は、人生は「希望」であり、人間にとって生きていることは「希望」を持っていることである。「希望」は生命をつなぎ、人生を紡ぐものであるとしています。そして、欲望や期待、目的といったものは、叶わずに「失望」することがあるけれど、どんなに「絶望」的な状況にあっても、人は「希望」を持つことができ、「希望」には人生を拓き、人生を変える力があるといった趣旨のことを、（たぶん）述べています。

皆さんは、これからの長い人生の中で、大きな壁にぶつかったり、困難な問題に直面することもあるでしょう。でも、人生は「希望」です。作家の柳田邦男氏も「危機的な日本の中で生きる若者たちに八か条」の一つとして「失敗や壁にぶつかって失望しても絶望することなく自分の考えを大切に」することを挙げています。

卒業生の皆さんが、この先どのような時代になっても「希望」を持ち続け、自ら豊かな人生を切り拓いていくことを期待しています。